

伊藤小舟撰  
東照神社略記

全

東照神社

一冊	二六	五架	六函	屬類
----	----	----	----	----

6

216

一本

014467-000-7

6-216

東照神社略記

伊藤 小舟/著

M8

ABB-0845



山  
南



伊藤小舟撰

東照神社畧記

松園藏



6-216

山  
齋



伊藤小舟撰

東照神社畧記

松園藏



乃深

紀元二千五百三十五年

杉取哲



# 官許

明治八年三月廿八日

東照神格記

伊藤小舟撰

山東照宮神社ハ贈正一位太政大臣徳川  
 源氏ノ後裔也抑モ公ハ新田義貞ノ一族徳川  
 四郎義季ノ末世良田有親ノ遠孫ナリ有親上野國  
 ヨリ三河ニ潛居シ其子恭親松平氏ノ壻トナリテ  
 ヨリ再ヒ家ヲ興セリ往昔南朝ノ前新田義貞義旗  
 ヲ舉クル後一族郎従ニ至ルマデ皆勤王ノ志深  
 ク數十年間一人ノ叛キタル者ナク子々孫々國事  
 ニ殉ス恭親又祖宗ノ意ヲ繼キ足利氏ノ專横ヲ疾  
 視スルテ數年後花園帝永享中三州ノ目代ニ除

セラレ從五位下三河守ニ任ズ是ヨリ世々岡崎ニ  
城守シ屢寇賊ヲ驅リ民ヲ安ンズ其五世ノ孫ヲ三  
河守廣忠ト云即公ノ父也公年僅カニ六歳ノ時駿  
河ノ國主今川へ質トシテ行ク途ニ織田信秀ノ兵  
ニ奪ハレ尾州熱田大宮司ノ家ニ銅セラル三河守  
死後又駿河へ質タリ客寓十數年其積年間岡崎ノ  
臣庶今川ノ為ニ勞役セラレ疲弊艱苦困窮スト雖  
モ豆ニ勉勵奮力唯公ノ成立ヲ待チ未夕嘗テ怨嗟  
ノ者一人モナシト云公年十八ノ時今川義元大衆  
ヲ率ヒテ織田信長ト戰フ公義元ノ陣ニ加里譜代

ノ將卒ヲ率ヒ大高城ニ糧ヲ入レ又コレヲ守ル義  
元衆ヲ恃ミテ桶峽ニ敗死シ駿河ノ軍皆逃奔ス公  
徐カニ三河ニ歸リ始テ祖先ノ居城ニ入ル是ニ於  
テ義元ノ為メニ尾州ヲ仇トシ信長ト戰フ依テ義  
元ノ子義真ヲ促ス義真柔弱日夜淫<sub>酒</sub>酖リ且嬖臣  
國政ヲ執リ封内大ニ亂レ與ニ計ルベカラス公大  
ニ憤腕獨尾州ノ勢ニ抗ス時ニ刈谷城主水野信元  
ハ公ノ叔父ナリ来リテ其理ヲ説キ勸メテ信長ト  
和セシム永録八年三河一國ヲ定メテ三奉行ヲ置  
キ民ノ疾苦ヲ察シ暴政ヲ除ク同九年從五位下ニ

叙セラレ三河守ニ任ス同十一年左京大夫ニ遷ル  
同十二年奏請シ徳川姓ニ復ス此年遠江國ヲ併ス  
元龜元年六月信長近江ノ淺井越前ノ朝倉ト戦フ  
即チ公ノ援兵ヲ乞フ公五千ノ兵ヲ帥ク之ヲ助ク  
其戰場公初ノハ淺井長政ノ兵八千ニ向フ期ニ到  
リ信長乞テ曰淺井ハ深ク憎ム所我自ラコレニ當  
ラン願ハクハ卿朝倉ヘ向ヘト公ノ諸將怒ツテ曰  
今戦期ニ望ミ方向ヲ易ヘハ士卒動搖セシ公奮ツ  
テ曰淺井ハ八千ノ兵ノミ朝倉ハ健兵一万五千我  
惟五千ノ客兵ヲ以テコレニ向フ士ノ榮ナリト則

進ミ戦テ朝倉ノ軍ニ勝ツ時ニ信長三万五千ヲ以  
淺井ノ八千ニ敗ス公又淺井ノ陣ヲ横撃シテ淺井  
朝倉ノ兩軍ヲ大ニ討チ敗ル信長大ニ悦ヒ日本第  
一ノ槍ト称ス元龜二年正月公正五位下ニ進ミ侍  
從ニ遷ル天正二年正五位上ニ進ム同六年從四位  
下ニ進ミ右近衛少將ニ遷ル同十年武田勝頼亡ブ  
信長駿州ヲ公ニ取ラシム公請フテ曰今川氏真武  
田氏ニ追ハレ流寓數年真ニ憐ムベシ今氏真ヲ駿  
河ノ主トシ我コレヲ保護セン信長頭ヲ揮テ曰今  
各自兵力撫恤ヲ以テ封土ヲ得ルノミ氏真ノ如キ

昏懦不明ナル昔日既ニ足下ノ交情ニ背キ足下ノ  
戚族ヲ滅シ將卒ノ妻子ヲ串殺セル衆人皆怒ル天  
地ノ容レサル所獨リ足下コレヲ思ハス何リ一寓  
公ニ厚キヤトテ聽カス公止ムテ得ス密カニ氏  
真ノ館ヲ造リ之ヲ給養ス同十一年十月公正四位  
下右近衛中將ニ進ム此年信長明智光秀ノ為ニ弑  
セラル甲斐信濃空虛國人協力偕ニ公ニ附ク是ニ  
於テ五州ヲ領ス同十二年二月公參議從三位ニ進  
ム時ニ故信長ノ宿將羽柴秀吉明智光秀ヲ誅シ威  
權獨リ盛ニシテ終ニ信長ノ兩子信雄信孝ヲ凌

弄ス兩子猜恣或ハ事ヲ起シテ成テス信孝已ニ亡  
ニ信雄孤立タリ秀吉大舉シテ尾州ヲ攻ム信雄狼  
狽憐ヲ我ニ乞フ公領諾シ五國ノ將士ニ議シテ曰  
今信雄窮蹙ス然ルニ信長恩顧ノ諸將皆秀吉ノ利  
言ニ迷ヒ一人モ信雄ヲ援ルナキニ至ル嗚呼信意  
ノ薄キ何ソ如此ナル吾レ固ヨリ交誼ヲ重ニス今  
援スレハ何ヲ以テカ天下ニ對ント衆議協同此ニ  
決ス急ニ出兵ヲ督シ一万五千人ヲ率ヒ尾州ニ到  
リ小牧山ニ陣ス秀吉十二万五千人ヲ以テコレニ  
對シ二重濠ヲ穿テ壘ヲ起シテ戰ヲ挑ム數日決セ



ス秀吉密ニ謀リ三万人ヲ分ケ間道我カ三州ニ亂  
入セントス公コレヲ知リ輕騎四千ヲ以テ秀吉ノ  
軍ニ尾シ公又自ラ信雄ヲ携ヘ俱ニ驅逐シ大ニ戰  
フテ三万人ヲ一戰ニ敗リ其將卒ヲ併セ斬首一万  
五千即夜小牧ノ陣ニ歸ル秀吉大ニ怒ル又謀ノ出  
ルナシ俄ニ信雄ト和シテ軍ヲ退ク後チコレヲ信  
雄ヨリ公ニ聞ス公憮然五國ノ兵ヲ収ム乃チ公ノ  
此舉タル天下義戰ト称シ咸ク感動スト云同十四  
年十月公中納言ニ進ム此時羽柴秀吉公ト和セン  
トシ百方計畫シ終ニ老母ヲ質トスルニ到ル公兼

テ朝拜ヲ希フ因テ京師ニ詣シ秀吉ニ接シ入朝  
ス即チ正三位ニ進ム同十五年八月大納言ニ進ミ  
左近衛大將左馬寮御監ヲ兼ヌ同十八年北條氏政  
朝セズ秀吉奏シテ討伐コレヲ平ク其關東八州ヲ  
以テ公ノ五州ト換フ現ニ八州ノ名ヲ以テ實ハ六  
州也當時公ノ封土タル三河ハ數世ノ固結ニシテ  
人民奉戴厚ク年久キヲ忌ミ事ニ乘シテ徙セル也  
五國ノ庶民大ニ望ヲ失シ將士亦快々樂マズ公神  
速五州ノ地ヲ致シ武州ノ江戸ヲ居城トス慶長元  
年五月公内大臣正二位ニ進ム同三年八月秀吉薨

ス公秀吉ノ遺子秀頼ヲ助ケテ國事ヲ接シ大老ト  
稱ス同五年上杉景勝入朝セズコレヲ討ントスヨ  
レヨリ先奉行ニ石田三成ナル者アリ慧巧ヲ以テ  
秀吉ニ寵セラレ匹夫ヨリ封侯タリ竟ニ己ニ類セ  
サル諸宿將ヲ陥没スル數人幼主ノ際君家ニ利ス  
ルヲ名トシ諸大藩ノ長臣等ト交結シ東西ニ兵ヲ  
起ス公コレヲ關ケ原ニ討伐シ其巨魁ヲ誅シ諸藩  
ヲ安シ同八年公征夷大將軍右大臣ニ進ム入朝  
シテ命ヲ拜ス秀頼内大臣ニ叙セラル公秀頼ニ嫁  
スルニ孫女ヲ以テス天下始テ無事同九年四月公

左大臣ニ進ム固辭シテ退ク時ニ秀頼禱ニ居シテ  
内大臣ニ進ム公諷諭再三入朝命ヲ拜スルヲ以  
テス秀頼ノ生母淀尼猜忌固ク執テ出サス同十一  
年公建白シテ禁廷ヲ大ニ修拓ス天下ノ侯伯ヨ  
レニ預ル積年ノ狹隘今日盛觀ヲ盡スト云同十六  
年三月公入朝特命太政大臣ノ内旨アリ固辭シ  
テ拜セズ同月上皇ノ宮ヲ修築シ供御ノ地ヲ多  
ク獻ズ同十九年復太政大臣ノ内旨アリ恐懼固ク  
辭ス此時ニ當リ秀頼已ニ長シ其臣大野某等多ク  
浪士ヲ集メ亂ヲ為サントス事皆淀尼ニ決ス公大

ニ憂ヒ屢無事ナラシメントス秀頼ノ傳片桐且元  
 又切諫シテ聞カレス終ニ退ケラル大野某輩志ヲ  
 得テ頻ニ浮浪ノ徒ヲ募リ城ノ近堺ヲ侵棄ス公止  
 ムヲ得スコレヲ征討シ又使ヒヲ遣ルテ數度母子  
 ノ安寧ヲ説ト雖モ菟集ノ浪士輩万一ノ僥倖ヲ欲  
 シテ戰ヲ好ミ元和元年六月終ニ羽柴氏亡フ同閏  
 六月公入朝シテ白銀万兩ヲ 朝廷へ獻ス同七月  
 關白藤原昭實ト議シ 朝廷式二十七條ヲ定ム同  
 二年正月公疾起ル同三月太政大臣ニ進ム同四月  
 公薨ス壽七十有五駿河ノ久能山ニ葬ル同三年遺

命ヲ以テ下野國日光山ニ改葬ス 朝議新廟ヲ建  
 シノ正一位ヲ贈ラレ號ヲ東照宮ト賜リ梶井親王  
 禮ヲ掌ルニ至ル今ノ忍岡并諸州ニアル神社ハ遙  
 拜或ハ因ル所アリテ建ルト云抑公ノ人ト為リ學  
 ラ好ミ浴ヲ求メ用ヲ節シテ人ヲ愛シ能ニ任シ器  
 ラ擇ヒ弱ヲ助ケテ剛ヲ推ク其 朝廷ニ事ルヤ壯  
 歳ヨリシテ恭順殊ニ至リ敵國ノ間ニアリテ 朝  
 拜意ノ如クナラスト雖モ密ニ使ヲ獻シ物品ヲ奉  
 ル 朝旨宣命アル毎ニ恐懼謹慎遙拜數四又其廷  
 臣ヲ尊敬スル他ニ類ナシ故ニ從五位ヨリ起リテ

漸次位階ヲ履ミ昇級ノ順序數十年人臣ノ極ニ到  
レリ俄ニ大官ニ至ルノ類ニアラス只皇國ヲ鎮  
護スルヲ以テ己カ任トシ克ク朝鮮ヲ來シ琉球ヲ  
撫ス始終儉勤ヲ主トシ自然驕侈ノ風止ム最モ言  
路ヲ開キ巧佞浮華ノ弊習ヲ去リ唯義ノ嚮ヲ所ヲ  
先トシ牧民ヲ以テ夙夜勉勵子孫ニ其遺志ヲ繼シ  
ムト云 朝廷ノ恩遇亦渥シト云モ可也今ヤ維新  
以來百事更張經倫ノ道大ニ開ケ苟モ國家ニ功勞  
アリシハ草莽ノ匹夫モ捨ス况勤王ノ魁タル楠  
公社ハ湊川ニ營造シ其他古今殉難死節ノ將士

朝恩ニ浴スル者收舉スヘカラス則チ此ノ新田公  
東照神社ハ特ニ官幣社ニ列セラル 朝旨ノ灼然  
タル千載不朽ヲ感戴セサルベケンヤ

東照神社畧記終

康賚神社畧誌

八

